

グリーン夫妻の墓

手塚竜磨



毎年一度はかならず京都へ出かけ、ここ数年は新島会館に泊ることにしているが、同志社へいくのは何か集りがあるときだけでこのところごぶさたしていた。昨年は卒業五十年のクラス会を十一月はじめ学外で開くので出かけたが、帰京の日の午前中、会館の近くから御所をぬげ、今出川門へ出て四年ぶりでは

つかしいキャンパスにはいった。そしておどろいた。グリーンゆかりの有終館、チャペルはもとのままだが、最初に設計した彰栄館が無残にも昔日の面影を失い安手の建物をぶっつけられるにたえなかった。チャペルが一九六三年三月に国の重要文化財に指定されているだけに、彰栄館のいまの姿にはがっかりした。

いうまでもなく、D・C・グリーンはアメリカンボードから日本へ派遣された最初の宣教師であるが、神戸、東京ですごした期間の方が長かった。神戸では市内で最初の教会を創設し、同志社教師時代には、ずぶの素人（しるうと）だったのに三つのレンガ建築を設計

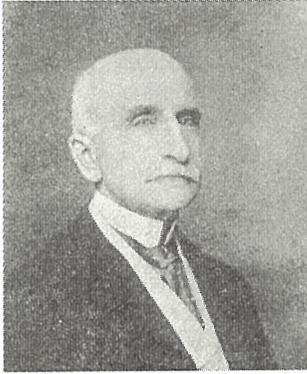
した。このうち定礎がもっとも古い彰栄館がどうしてあんな姿になったのか理由は知らないけれど、在学時代の思い出をなつかしもうと足をはこんだものにとっては、「なまげない」という以外にさびしい気持を表現する言葉を知らない。いっそうのこと解体して明治村へ移築してもらった方がよかったのではないかと思っただけである。

はなしを東京に移そう。同志社で教鞭をとったアメリカンボードの宣教師は数多い。だが東京に定住したのはグリーン夫妻だけである。明治三十二年に東京府知事あてに提出した宣教届の住所は牛込区市谷仲ノ町二十二番地で、布教先は国内各地のキリスト教会、そ

の他信徒及有志者宅と記入されているが、その中心は麹町区中六番町十番地の番町教会（牧師綱島佳吉）であった。その後麻布区新竜土町十二番地へ転じた。

東京での仕事は布教のほか聖書翻訳事業、番町教会員であった片山潜が神田三崎町に日本で最初のセツルメントであるキングズレーホールを創設したとき資金を出したこと、日本アジア協会の会長として会報に天理教研究や高野長英伝などを寄稿、その他条約改正やカリフォルニアの日本人排斥運動に対し大論陣をはかるなど日米関係の改善につとめた。その事例はここに挙げてくれない。

在日期間の大半を東京ですごした夫妻にとって最後の休暇帰米は一九〇七年（明治四〇



D.C. グリーン

年）だった。この間に夫人は胃ガンの大手術をうけ一時快方に向ったけれど、もはや余命いくばくもないことを知り、どうせ死ぬなら日本へ帰り、そこに葬ってもらいたいと夫君に希望を述べた。そして翌年日本へ帰り、半年余りすごしたのち麻布の自邸で永眠した。葬儀はゆかり深い番町教会でいとなまれた。そのちグリーンも聖ルカ病院に入院、ふたたび東京に帰って聖書改訳事業の完成を念願していたが再起できず、葉山の静養先でなくなった。夫人の没後わずか三年である。

夫人がなくなったとき、新聞は死去と葬儀の記事をのせ、青山墓地に埋葬予定と報じている。だから夫妻の墓は青山にあるはずだが、長い間その所在がわからなかった。東京に定住して四〇年になる私は空襲のひどかった戦時中の一時期をのぞき、土曜日の午後はほとんど墓地巡礼についやした。公営墓地だけでなく寺院墓地へも足を運んだ。それは以前からやっていた、明治初期来日欧米人の業績研究の一環としての遺跡探訪であり、むろんお雇外人も対象になった。そのためには寺院墓地もたずねる必要があったが、重点を教育や社会福祉事業を通して日本の近代化に寄

与し、日本の土となった英米のプロテスタント系宣教師においた。旅行しても大・中都市、とくに開港場となったところでは地図を片手にして探しまわった。

東京でも、とくに外人墓地のある公営墓地やミッション墓地のある寺院などはわかりやすいけれど、いわば雑居地区とでもいえる一般墓地ともなれば、よほどの偶然がさいわいしないかぎり、いくど足を運んでも探し出せない。東京市以来、いまだに都の碌をはんでいるのでいいにくいのだが、一体管理事務所は何のためにあるのかと一市民としては憤りを覚える。備えつけの帳簿は埋葬者よりも管理料支払者におもきをおいてつくられているから役にたたない。それでも戦前からの探訪のつみあげでミッション関係のおもなものは東京だけで二冊のリストを作製した。残念なのは最近までグリーン夫妻が欠けていたことである。その間に所在を聞かれたことはたびたびあった。が、そのつど知らぬ存ぜぬと返事していた。東京に久しく定住し、昔のようには動けないが、それでも来日外人の研究家がたずねてくれれば案内役を買って出ている。それにしても同志社人としては何となく

気がひけるのはグリーン夫妻の墓が発見できないことであった。

先日も若い知人から聞かれた。グリーンにはごどもさんが多く、もう故人になった人もいるが、大学教授、外交官、医師、海軍々人などいづれも名を知られている。一九六〇年に日米修好通商条約締結百年の記念行事がおこなわれたとき、同志社から推薦してきたD・C・グリーンのほか神戸生まれの長子エバーツとその弟ジェロームのふたりも在米邦人の推薦で日米文化交流、友好親善の功労者として表彰された。故人となった人たちが、その後ダニエルの墓をたずねて来日した孫にその祖父の墓の所在をきかれ、返事に困ったというので、それを聞いた知人が「もしや」と思って私にハガキを寄せた。

返事に困ったのは、日本医学史の大家で順天堂大学教授の小川鼎三博士である。博士が渡米したとき来日した孫にあたる人からたいへん世話になったのに、墓の所在を知らせることができなかった。その話を聞いた若い知人は、わざわざ多摩地区から青山墓地をたずね、小高いところから見おろしたら、それらしい墓があり、その前に立って確認したとい

って電話をかけてきた。この電話はどうれしく聞いたことは最近にない。若い知人というのは、いまでも青山墓地に眠る外人のことで交渉があった、青山学院大学英文科出身で東京学芸大学付属図書館に勤める青年学徒武内博君である。はじめ墓地の所在を聞かれたとき思いあまって番町教会へ電話した。杉浦義人牧師は校友である。創立八十六年になる教会も戦災をうけたがグリーン夫妻や片山潜の名は記録されているという。でもグリーン夫妻の墓の所在は申し訳ないがわかりませんということだった。杉浦さんは片山潜の建碑のとき戦時中だったが参列したとおおよその場所を知らせて下さったので、電話したのも無駄ではなかった。

武内君からはいづれ写真同封で詳しい墓所の所在を知らせてくることをあてにしていたが、待ちきれず、片山潜の墓だけでも思って快晴にめぐまれた土曜日の午後カメラをもつて出かけた。事務所へよっても無意味だと思つたが片山潜の墓ならわかるだろうと若い職員に聞いてみた。共産党も合法政党になっているから名墓一覧表に書きいれてある。さすがは戦後である。ひそかに建碑のときたち

あったという時代はもうすぎ去った。

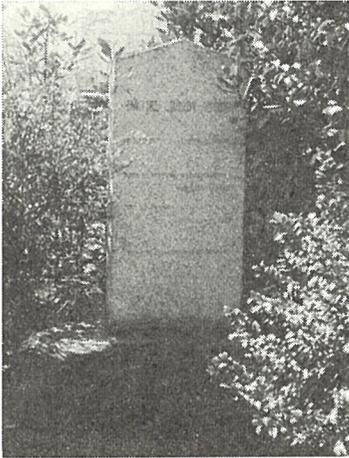
グリーン夫妻の墓の面影をみているのは城南石材工業店の当主であると武内君から聞いていたのでまずそこへ行って進藤五郎さんに会った。私は以前から外人墓地にある日系米人で新聞の父であるジョセフ・ヒコの墓地保存会の会員として毎年ヒコ忌の墓前祭には出席しているが、進藤さんとはそのときあったことがある。だから、気さくに案内してくれ、墓前でしばらく話し合うことができた。死んだおやじが夫妻の碑名をきざみ建碑したという縁もあり、お詣りする人はたえてないが墓のお守だけはしているという。道理で夫妻の墓所はきれいでチリひとつなかった。たいへんな奉仕である。無縁墓地にされなかったのは進藤さんが守ってくれたからだ。管理料をI・B・Cが払ってくれるようになったのはここ数年来的なこと、それも進藤さんが毎年事務所（現在は早稲田にある）まで出かけていって受け取り、墓地の管理事務所へ納めているという。心あたたまる思いで三〇分以上も墓前で対談した。

グリーン夫妻の墓のある場所は一環口第五号八側から入ったところで、青山通りへは近

い。外人墓地などよりずっと手前にあるのが墓地通りの人家ばかりつづいていてところの裏側にあるので目だたない。私もかつて一度も足をふみ入れたことのない一廓である。夫妻の墓は広い区域に二基別々に並んでいる。木々に囲まれ一緒に写すと後方のビルがいや応なしに入ってきてうまくとれなかったが、左が夫人メアリ、右が夫君ダニエルである。夫人の墓には、

MARY JANE
WIFE OF
DANIEL CROSBY GREENE
OCTOBER 3 1845
APRIL 18 1910
THEY SHALL OBTAIN JOY AND
GLADNESS

とあり、台石には、よく読みとれないが、



D.C. グリーンの墓

THE MOTHER OF OUR MISSION
ABCFM
1869-1910

ときさまれ、夫君のには、

そして台石には、

DANIEL CROSBY GREENE
FOR FORTY FOUR YEARS
AMISSIONARY TO JAPAN
BORN IN ROXBURY
MASSACHUSETTS
FEBRUARY 11 1843
DIED AT HAYAMA JAPAN
SEPTEMBER 15 1913
FOR OUR CITIZENSHIP IS IN HEAVEN

墓之ンーリーグ 等三勲

とはっきり記されている。生地のロクスベリーは、のちポストンに吸収合併された。

湯浅半月の「十二の石塚」に大きな影響を与えたといわれるグリーンへの講義、京ことはがたくみだったと伝えられる夫人、この夫妻の墓を若い学徒の手びきで四〇年という歳月を経ておとずれることができたのは私にとつて大きな喜びである。長生きしてよかったとつくづく思った。

グリーン夫妻の墓とは相当離れているが、昭和八年十一月モスクワで客死した片山潜は若くしてなくなった夫人や長男などの墓に分骨され、戦争たけなわの十八年三月、岩崎清七（同時代の渡米者、のち東京瓦斯会社社長）によって、りっぱな墓碑がたてられた。この日はぐったりして足をのばせなかったが、墓地下入口近くから左に入ったところには「市川夫妻之碑」がある。かつて知友に贈った私家本にプロテスタント唯一の殉教碑として紹介したことがあるが、市川夫妻とはグリーンが来日早々東京で日本語教師として迎え、神戸へ同伴した市川栄之助とその妻松子のことである。O・H・ギューリックも市川から日本語を学んだ。かれによれば、市川は物ごしのやわらかな人物であった。

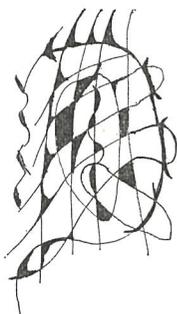
市川はあるとき自宅でへボン訳のマルコ伝

の写しをとっていた。当時はまだ印刷されたものがなかった。ある日サムライがたずねてきて市川が写しとっている姿をみたが間もなく夫妻は官憲に捕えられた。理由は市川が国禁を犯して聖書を手にしていたのに、それを知りながら松子が官憲に密告しなかったというのである。悲報は隣人からグリーンに伝えられた。この事件は駐日米公使を通してアメリカへも伝えられ、当時明治政府の最初の使節団として滞在中の岩倉大使一行を当惑させた。岩倉は一行中の大物、大久保利通と伊藤博文をいそぎ帰国させると共にキリシタン禁制の高札の撤去を指示した。

獄舎は神戸から京都へ移され夫人だけは出獄したが栄之助は獄死し、しかも遺骸のゆくえは不明にされた。失意の夫人は上京し、多くの教友にいたわられた。なかでもグリーン夫妻は松子がなくなるまで生活の世話をみている。この記念碑は明治三十七年七月、キリスト教徒有志によって建てられ、五年後死去した松子は、そのかたわらに葬られた。青山霊園は区部では最大の共葬墓地であるが、ここにゆくりなくもグリーン夫妻と関係深い市川夫妻の記念碑と片山潜の墓が三角形の頂点

と二点を結ぶような形で位置づけられているのは同志社人だけでなく、明治思想史の研究家にとつても感銘深いことである。

（大正一〇年大学文学部卒、東京都公文書館勤務）



同志社改革案

総長住谷先生への私信に、思いつくままに同志社改革案を認めて夜の覽に供したところ、時報に掲載してよいかと、折返しお手紙をいただいたので、早速文章を練り、改めて清書することにした。

一、同志社の各学部を単科大学に

オックスフォードでも、ケンブリッジでも、いくつものカレッジが集まって、ユニヴァーシティとは成っているのである。多分新島先生は、同志社を「同志の社」とお考えになったのであろうが、さすれば「同志」が名称で社はユニヴァーシティを意味するわけだ。

私は同志社工科大学、同志社経済科大学、同志社政法科大学、同志社家政科大学、同志社神学大学、同志社医科大学等の単科大学 (College) に改制するのがよからうと考える。

清水安三

而してその各カレッジを距離的に、能うだけ遠く引き離し、おのおのキャンパスを異にするがよいと考える。

教授会も別々にして、年に一回ぐらい懇談、親睦会を連合教授会の名称の下に開会するぐらいのところに止めるがよからう。

学生会も各カレッジ別々に組織して、創立記念日にも、各カレッジ廻り持ちで、連合学生会を開催するぐらいに止めるがよい。どちらかと言うと滅多にそれも開催せぬ方がよからう。

学者という者は、えてして俗才に弱いのが常であるから、大きい大学を運営することは不得手である。たまには碩学にして手腕家でもある人物が現われるが、そうした人物は不世出で、稀有であると思わねばならぬ。けれども、一カレッジぐらいの学長の任に当たるぐらいならば、まことに容易で、選ばれたら誰でも任に耐え得るで

あろう。

私は各カレッジを独立経営せしめるがよいと考える。総長は各カレッジの冠婚葬祭や、社交の中心となり、主として、外に対しては名譽的な代表者となり、内に対しては専ら精神的指導し、各カレッジに内紛を生じた時の仲裁和解の処理に参加して、一種の火消役を買って出ずるポストに止まっているがよい。その形式は督学官、視学の如き任務を果たすことによって十分に果たし得るであらう。

各カレッジには、教授、助教授、専任講師、助手、事務員など、学生から選ばれた委員によって、実行委員会を開いて、各々、カレッジの決算、予算を報告し、審議し、大小の校務を決議することにするがよい。教授は数名、助教授も数名、講師からも数名、学生からは十数名かを選んで実行委員会を組織するがよい。学生からの委員は、クラス委員と学生自治会の役員を実行委員とするも可である。教職員から選出された委員と、学生から選出された委員の数をどうするかは問題であるが、三対一ぐらいの比例がよいのではないかと考える。無論、授業料値上げの可否の如きも、この実行委員会で決めるべきである。ただし、授業料の値上げの件は、教職員の主婦家族の代表も給与引き上げの運動を行動して、代表者を実行委員会に送るべきである。授業料値上げの理由が、給与引き上げに直接連なるからである。

各カレッジの提出する予算案、あるいは、企画等で、同志社の理事会、評議員会が了承せない場合は、その理由を聴いて、もう一度、カレッジの実行委員会に持ち帰って、練りなおして再び理事会、評議員会にかけることにはせよであらう。学生が運営に参加しておることによって、学生運動は必ずや容易に指導し得るであらう。

二、男女別学は時代遅れ

同志社の単科大学を、一カレッジは既在の同志社の本部、相国寺門前町（烏丸今出川東入ル）に置き、一つのカレッジを同志社女学校（寺町今出川西入ル）に置き、一つのカレッジを岩倉に置き、一つのカレッジを香里に置き、一つのカレッジを田辺に置くがよい。神学大学のごときは、大阪もしくは東京に移すのも一案である。

では、高校、中学は如何にするかというに、同志社女子中学と男子中学とを一校に合併すれば一校のキャンパスが余るし、同志社女子高校と香里、岩倉の三校を合併すれば、二つのキャンパスが余るであらう。男女共学の中学校一、男女共学の高校一つあれば十分であると思うがどうか。

次に同志社女子大の英文科と、共学の同志社大学英语科とを併合して、共学の同志社文科大学の中の一学科とせばよいであらう。

男女別学は今日では、教育学上問題になっている。か

の大久保清が群馬県から出たので、群馬県では県立高校が皆男女別学になっているから、こうした事件が起つたのではないかとさえ論ぜられている。男女共学の大学で、セックスの問題で最も率多くしくじる女学生は男女別学の高校卒業生であつて、会社の職場で、セックス問題でしくじる女子社員は、率多く男女別学の大学出身者であると已に統計をもつて調査されている。

米国では長い年月、女子教育学問の大学として知られているスミス・カレッジも男女共学に踏み切ることになつたし、男子のみの教育にたずさわつてきた、ダートマス・カレッジも、このたび、ウェスレイ元大学学長（女性）を顧問にして、新年度から共学に踏み切ることになつた。わが国でも、津田、東京女子大への志願者はめつきり減じつつあるとのことである。

同志社がもしも、男女共学に改革するならば、各単科大学の機会、キャンパスを分散することも便宜で、医科大学の如きも設置し得るであろう。ぜひ同志社は医大を設置するがよいと考ふる。医学者のゴールドン博士の医学部が消滅して、佐伯病院として残存しているのが、中学、高校、女学校の別学を共学に付して、校舎とキャンパスをあまして医科大学を設立してはどうかと考ふる。

紛争、騒動が起こる原因をよく考え、学生が群集心理に駆られざるよう、学園を改革することが最も聡明であ

ると考ふるかどうか。

三、授業料の値上げ

授業料の値上げは、毎年行わるべきである。ただしその値上げの率は、人事院が内閣に申告するその年の物価上騰率だけ、それだけを翌年四月から全学の学生の授業料を引揚げるべきである。その代わりに人事院が、その年がデフレで、物価が下降したことを報告したならば、無論、その報告された下降率だけ翌年の四月から全学の授業料を引下げるべきである。無論、デノミが断行されたら、デノミに応じて授業料の額を新しい貨幣によって決定されるべきことは言うまでもないことである。

人事院が物価の上騰率を内閣に報告した場合に、官吏の給与は、或は一月に、或は四月にさかのぼつてその率だけ引揚げられているし、また、それに順応して会社商店等サラリーマンの給与も或はさかのぼつて四月から、それとも、さかのぼらずに九月から増給されているはずである。

それ故に、学生の父兄の月収は、皆すでに増給されているのであるから、授業料が増額されても何の痛痒なきわけである。かく言えば、学生たちは、学生の父兄はサラリーマンばかりではなく、商人、農民もいるではないかと主張する者もいるだろうが、商人や農民たちの方がサラリーマンよりも一足さきに増収を得ている場合も少

なくないし、そうでなくても早晚増収するに至ることになっていたのである。

また、学生の携わるアルバイトの賃金も、物価の上騰率に応じて引揚げられるはずであるから、授業料を人事院の査定程度の率に引上げても、よほど、授業料の値上げ問題は問題化せぬようになるであろう。

今日、大きな大学が、金融に都合つくものであるから何年間も授業料を値上げせずにおいて、にわか「ドカン」と、或は倍に、或は五割増しに増額するものであるから、問題となるのではないかと考える。

それから、授業料を増額したら、その率だけ教職員の給与を増額すべきである。そうするならば、教職員が学生に味方して授業料値上げ反対問題に熱狂することはなからうと思う。

早稲田大学の学生たちが、これはテレビで見たことではあるが、値上げ反対の大会に一般社会の主婦たちを集めて彼女等の声援を得ていたけれども、私は、もしもあ的主婦たちが、一般の主婦ではなく、早大の教職員の主婦たちであったならば、

「お前さんたちのお父さんのサラリーは増額されているのです。あたしたちの主人のサラリーも上げて下さらねば困ります。」

さらに、私は学生に学校の運営に参加せしめているな

らば、授業料値上げ騒動のごときは避け得るのではないかと考える。学生の代表者をして、教授会を法延のごとく、議会のごとくに傍聴せしめることも一案であるが、学生と教授、職員とが何等かの形で学校の運営に力強く参加し得るように学園を改制すべきであると思うがどうか。

詮ずるに、学園の運命に最も関心深かるべき者はその学園の教職員であつて、学園に良い教育が行われるかどうかは、学生の最も深く関心することであるから、教職員と学生の発言に大いにウエイトを置くべきである。その学園の卒業生のごときは、母校が繁栄してさえいよくれば、それで満足すべきであるから、従来のごとくに株主気取つて大いに出しゃばるべきでないと考えるがどうか。

(大正四年大学神学部卒、桜美林大学学長)

